

日本の伝統・文化を継承する若者たち

# 明日への扉

Door to Tomorrow



Ken Yokkaichi

1980年、富山県高岡市で郷土料理の店を営む家に生まれる。東京の大学に進学し、テレビ番組の制作会社に就職するが30歳で帰郷し、この道の第一人者である四津谷敬一氏に入門。以来、研鑽の日々を送る。



烏帽子(えぼし)

平安時代以降、成人男子が日常的に被り、近世まで公家や武士の間で用いられた被り物。大きく二種類に分けられ、神職が被る烏帽子は公家の立烏帽子、相撲の行司が被る烏帽子は武士の折烏帽子がルーツという。

日本の伝統・文化を継承する若者たちを紹介する映像ドキュメンタリー「明日への扉」をぜひご覧ください。

MOVIE WebやTVなどでお楽しみいただけます。

Web版

パソコンやタブレットでもご覧になれます。本紙掲載以外に、多数の若者たちをご紹介します。

アットホーム明日への扉 検索



TV番組 ディスカバリーチャンネル(CS) 冠番組

「アットホーム presents 明日への扉」放映中 毎週金曜日 22:53~23:00

ビジョン ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

NEW!! 最新号のご案内 好評公開中

No.070 / 越前打刃物職人 田村 徹 氏

## 烏帽子職人

四日市 健 氏

失われつつある技を、次世代に継ぐために。

日本の伝統を感じる装いの一つに、烏帽子がある。被り物が成人男子の証しとされた平安時代、公式の場で被られた冠に対して烏帽子は日常的に着用された。やがてその風習が薄れると儀礼的な物へと変化し、現代では主に神職の装束として受け継がれている。

きつかけは？

四日市「いつか故郷に帰ろう」と思っていた富山に戻ったとき、父からまたま師匠の話聞いたんです。全くの好奇心から工房を見学したら、毎日通うほど師匠の手仕事に惹かれてきました。師匠とは、年齢が大きく離れてはいますが、すぐに打ち解けあうことができました」

工房に、紙の束がうず高く積み重ねられている。「明治三十二年」「金三拾円」「論語」などと書かれたそれらは、烏帽子の材料となる古い帳簿や教本。百年以上前の和紙は薄くて強く、しかも軽い。ため被り物に最適という。

年季の入った和紙を数枚貼り合わせ、刷毛のような道具で打って「しほ」を付ける。しほとは烏帽子独特の凹凸模様のことで、それが深いほど見栄えは良くなるが、打ち過ぎると破れてしまう。

力加減を見極めながら、端正にしほを施した和紙を黒い紙で挟み、再度しほを付けて柿渋を塗る。そして金型に当て、烏帽子の形に仕上げる。しほを潰すことなく端と端を合わせ、丸みをきれいに整える作業は想像以上に難しいが、それを終えても気は抜けない。さらなる難関、烏帽子の中心を藤で縁取る作業が待ち受けているためだ。師匠が「生命線」と言うように、縁の線が真つすぐでないとい全体がいびつに見え、

台無しになる。時間をかけ、全神経を傾けて直線を描くと完成は間近だ。

今後の抱負は？

四日市「修業を積むうちに、現在では数名しかない職人の技を、自分で終わらせるわけにはいかないと思うようになりまし。千年以上も続く技を次世代に伝えるという重責を自覚しながら、日々取り組んでいきます」

未知の世界に飛び込んだ若き職人は、使命感にみちみちる頼もしい存在となった。師匠との出会いは偶然ではなく、必然だったのかもしれない。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

※2013年1月取材。掲載内容は取材当時のものです。

MOVIE MORE!! 師匠の技を継ぐべく、ひたむきに修業する姿を動画で紹介しています。ぜひご覧ください。